



## 電動化に取り組む意味

専務執行役員 西村 文孝

“自動車業界は百年に一度の変革期に来ている”，とよく耳にする言葉である。

簡単にいうと電動化によって自動車という商品とそれを取り巻く環境が大きく変わるということと受け止めている。勿論ジャトコもその流れに乗り遅れないよう、そしてその先端を走ることができるよう、様々な施策を進めている。

既に世間ではe-Axleという名前で電動パワートレインに関わる新商品の発表や新技術の紹介が日を追うごとに増えている。これを刺激に切磋琢磨していくことで、より良い商品を市場に提供できる環境が形成されつつあると日々感じており、モノづくり企業としてその真価が問われる一方、今迄培ってきた実力が発揮できる好機とも言える。

ここで“変革期”と言うからには、単純にモーターで車を走らせるだけでは済まないという事も考えるべきポイントである。“電気を使って車を動かす”それによって今迄なかなか出来なかった事が容易に実現できる事象が多々出てきても不思議ではなく、それらをビジネスモデルの中に取り込むことができ初めて“変革期”を語る資格があると考え。自動車の性能・品質・カスタマーサービス等々それぞれについて所謂コネクティビティを軸に飛躍的な利便性の発展が期待でき、何よりもそれを使用するお客さまの目が肥えていくのと併せてその嗜好がどんどんと進化していくことは火を見るより明らかである。一度便利な物を使うともう後には戻れない、そのような事例は例えば個人で楽しむ音楽の保存はカセットテープ・CD・メモリそしてストリーミングサービスとデジタル化の波にのってものすごいスピードで進化してきた。携帯電話もしかり、PCもしかり、こういった事例は枚挙に暇がない。そしてそこに新たなビジネスの機会が生まれることにより、更なる業界の発展が期待できる。我々が身を置いている自動車業界においても、既に発売されている様々な電動車の運転席に座ると先の事例と同様“これからの車はこうなるのです”と、商品の進化をユーザーに問いかけているかのような印象を受けることが多々ある。

他方、地球環境に対するインパクトを軽減すること、温暖化対策としてCO<sub>2</sub>に代表される排出物を最少に抑えることもここ最近の気候変動を鑑みて、全排出源の二割強を占めるとも言われている自動車業界に身を置く者としての責務であると痛感している。電気エネルギーをどう

やって作るかは論議されるところではあるが、それを差し置いても内燃機関から電気モーターへの置換は技術者として向かうべき主要方策であり、それと同時に温暖化ガスを出さない生産方法も挑戦すべき新たな課題である。百年に一度の変革期は好むと好まざるとに拘らず、こういう側面でもこれを受け入れ対処していくことが自動車製造を継続・発展していく上で必要不可欠である。

今ここに“電動化”というお題が我々の目の前にあるが、目指すべきものは今想像できる“電動化”だけではなく、もっと沢山の可能性があり、言い換えると“電動化”に取り組むということは“想像して”，“悩んで”，“考えて”，そして“未来を創造していくことを楽しむ”という事であって欲しい。そしてその先に今成しえていない世の中・環境への貢献ができれば製造者冥利につきる。この業界に携る一員として是非それを模索・研究し、問題解決に苦勞し、最後に社会・お客さま・そして自分達が納得のいく結果を掴むことのできるよう皆で頑張りましょうと申し上げたい。何しろ百年に一度の機会に身を置く幸運に恵まれたのだから。